

## 自由遊びにおける幼児の態度や行動の発達に関する研究 ー保育園における参与観察ー

### A study of the development of children's attitudes and behaviors during free play : Participant observation at a preschool

千 葉 洋 平

Yohei CHIBA

#### 1. は じ め に

近年、社会生活を送る上での態度や行動に問題のある小学生が増加している。それは「集団行動が苦手」「集中力が続かない」「物を大事に扱わない」「すぐ『疲れた』と言う」等の問題である。これにより、学校現場では、授業をスムーズに展開できないことや、場合によっては学級経営さえも困難になる事態が生じている。

こうした課題の解決策として挙げられるのが遊びである。遊びによって子どもは、様々な社会的スキルを身に付けていく。しかしながら、大人によってコントロールされた遊びの場合、創造性、リーダーシップ、集団に必要なスキルが育たないといった報告<sup>1)</sup>もあり、遊びを通じた発達を検討する場合、遊びの特徴に配慮することが求められる。こうした中、久保は、従来の体育・スポーツ領域において遊びが「活動」や「運動」として捉えられていたことを批判し、その上で、遊びは活動ではなく、遊びという様態であり、遊びの様態へ作用するものとは何かが問われるべきであると主張している<sup>2)</sup>。

以上のことから、遊びを通じた子どもの態度や

行動の発達を検討する場合、遊びの様態や遊びによって態度や行動が発達していく過程について検討することが求められよう。そして、さらに対象とする子どもの範囲についても、この問題が生じる以前の幼児期に焦点をあて、検討することが必要であろう。

そこで本研究では、幼児期の子どもの遊びを実証的に観察し、遊びの様態の特徴、あるいは遊びの中で子どもの態度や行動が発達する過程を明らかにし、当該問題に関する基礎的な資料を収集することを研究の目的とする。

#### 2. 方 法

##### 2.1. 研究協力者

A市内にあるB保育園の園児及び保育士を本研究の協力者とした。分析対象とした観察期間の研究協力者は、5歳児23名(男児:12名、女児:11名)、4歳児25名(男児:15名、女児:10名)、3歳児21名(男児:8名、女児:13名)及び保育士8名(男性:1名、女性:7名)であった<sup>3)</sup>。

##### 2.2. 観察期間

参与観察は2012年10月から2012年12月まで週

2～3回の頻度で計18回行った。その中で得られた観察記録を本研究の分析対象とした。

### 2.3. 手続き

研究者は、自由遊びの時間<sup>4)</sup>に子どもたちに交じって遊びながら、子どもの遊びについて参与観察を行った。自由遊びが終了すると同時に、研究者は保育園を離れ、観察された内容をフィールドノートに記録した。

観察期間中に確認された子どもの遊びの特徴及び子どもが遊びの中で態度や行動を発達させるエピソードを10の形態に分類した。

## 3. 結果及び考察

今回の調査で確認された10の形態は次の通りである。

### 3.1. 子どもの遊びの特徴

#### 形態1：空想の中での遊び

子どもの遊びの場面では、以下のような空想の中での遊びが展開されていた。

【エピソード1：空想の中でのサッカー遊び】5歳児の子ども4名（男の子3名、女の子1名）と一緒にサッカーのシュートゲームをして遊ぶこととなった。私<sup>5)</sup>がゴールキーパーとなり、子どもたちが順番にシュートを打つ。私が並ぶように指示したわけではなく、子どもたちは自然と列を作り順番にシュートを打つようにしていた。

このシュートゲームの特徴は、子どもたちが自分のシュートに名前を付けてボールを蹴ることである。女の子にはそれが見られなかったものの、男の子は「ダイレクトアタック」と自分のシュートに名前を付けてシュートをしたり、蹴る前に両手を横に広げながら何度も回り、シュートをしたりする行為を見せていた。子どもたちは、この遊びにとてもめり込んでいて、何十分も飽きずにひたすらシュートを打っていた。

【エピソード2：過去の経験を利用した遊び】この日、5歳児は昼間に動物園へ遠足に行っていた。夕方の自由時間の遊びでは、そうした経験が

影響していると考えられる遊びが展開されていた。男の子は細い枝を指の間に何本もはさみ、それを怪獣の爪に見立てて、男の子同士で戦うという遊びを行っていた。

#### 形態2：適度な難易度

子どもが遊び状態に入っている際には、遊びがその子どもにとって適度な難易度であった。

【エピソード3：キャッチボール】私は一人の5歳児の女の子とボールで遊ぶこととなった。私が高くボールを投げ、それを女の子がキャッチをするという単純な遊びである。そのうち私が命一杯高く投げたボールでもその女の子はキャッチできるように、その場は盛り上がっていく。すると、それを見ていた他の5歳児たちも集まってきた、最後には7～8人の子どもが参加するようになった。遊びとしては至って単純なものである。しかし、子どもにとっては、できるかできないかちょうどよい課題であり、さらに大人が命一杯投げたボールをキャッチできたという感動が伴い、そうした面白さが子どもたちをひきつけたのだと考えられる。

#### 形態3：ルールが存在

子どもたちが自らでルールを設定するエピソードが確認された。

【エピソード4：自分の都合のよいルールの設定】5歳児と一緒に「ハンターゲーム」という鬼ごっこを行った。これは子どもたちが思いつきで始まった鬼ごっこである。ここでは、子どもたちの都合の良いルールが、子どもたちによって勝手に設定された。

私は「ハンター」と呼ばれる鬼であり、子どもたちを追いかける。子どもは「人間」であり、ハンターにつかまらないように逃げる。その際子どもはブロックを両手に持っていて、手に持ったブロックから色々なまじないをかけていく。

例えば「動けなくなるビーム」と声をかけて私にブロックからビームを浴びせ、「動いちゃダメ」と私に言い、私を動けなくさせるルールを子どもは勝手に作る。あるいは、「バリアのカーテン」

と言ってブロックからバリアを自分の周りに作り、私がタッチをしても大丈夫と言う。そうした自分に有利で、決して自分が鬼になることのない身勝手なルールを設定することで、子どもはどこか有能感を感じているようだった。

#### 形態4：学年に分かれた遊び

子どもはほとんど学年に分かれて遊びを行っていた。

【エピソード5：学年毎に遊びを行う実態】遊びが学年毎で行われるのは、決して保育士が決められているからではない。園庭の真ん中で遊ぶことが多いのが5歳児である。4歳児も園庭でドッチボール等の遊びを行うが、3歳児は園庭の隅の砂場等で遊ぶことが多い。こうした状況についてある保育士は、幼い子どもは友達と一緒に遊んでいるようで遊んでいなかったりするため、年長の子どものように遊ぶことが難しいことを話していた。学年によって遊びには、発達段階が影響していることが本研究でも確認された。

#### 形態5：活動量の偏り

遊びの中で子どもの活動量に偏りがあることが観察された。

【エピソード6：ドッチボールにおける投げる回数の偏り】4歳児の子どもたちが、ドッチボールを行っている。しかし、ボールを投げる子どもは決まっていて、ほとんど投げない子どもさえいた。ボールを投げるにはボールを拾い、自分のものにすることが必要となる。そのため、活発な男の子ばかりが、ボールを確保して投げていた。時にはおとなしい女の子が投げる機会があったものの、ボールに勢いもなく、その女の子自身もあまり積極的に投げたいという意識はないようだった。

#### 形態6：盛り上がりの難しさ

遊びを行っていても、遊びの盛り上がりには欠けてしまうエピソードが確認された。

【エピソード7：盛り上がらなかっただるまさんが転んだ】5歳児の女の子が「だるまさんが転んだ」を行いたいということで遊びが始まった。これは、以前この遊びで盛り上がった経験があっ

たためである。

最初は楽しく遊んでいたものの、その後、鬼になった子どもが「だるまさん転んだ」を早い口調で言うようになったり、あるいは友達が動いていないかどうか確認する時間が長くなったりし、周りの子どもからクレームが出る場面が増えていく。さらに、鬼から「動いた」と指摘された子どもが「動いてない」と言い返し、雰囲気が悪くなってしまう、遊びは終了してしまった。盛り上がりにはルールを守ることが、その前提になること、そして同じ遊びでもその時によって盛り上がる状態に入れない場合があることがこのエピソードから確認された。

#### 3.2. 子どもが遊びの中で態度や行動を発達させる実態

##### 形態7：大人の存在

自由遊びの時間では、常に教師が子どもの遊びに立ち会っている。子どもが自由遊びの中で態度や行動を発達させるには、教師が重要な役割を担っているエピソードが確認された。

【エピソード8：後片付けの場面での教師の関わり】4歳児のクラスが後片付けの時間に入り、保育士たちが遊び道具を片して部屋に戻るよう指示を出していた。ほとんどの子どもが自分が使っていた道具を片し、教室の前のスノコに一列に座って片づけている子どもを待っている。2人の男の子は、すぐに後片付けをすることができず、先生から指示をされてもしばらく遊んでいた。

女性の保育士が直接、片付けるように指示を出すと、その2人の男の子が片づけを始めた。砂場で使っていた箱を自分の手で持てる限界の高さまで積み重ねて、それを運ぶ。ただし、決してふてくされるような態度ではなく、どこか道具を片付けるのさえ楽しんでいるような表情をしていた。

##### 形態8：ルールの存在

自由遊びの時間では、保育園で設定されているルールが確認された。

【エピソード9：保育園で設定されているルール】自由遊びの時間には、保育園で設定されてい

るルールが存在する。例えば、朝と夕方の時間帯に水遊びをすることは禁止されており、それは洋服が汚れるためである。そうした全体のルールがいくつか存在している。

#### 形態9：遊びからけんかへ

遊びからけんかへ移行してしまうエピソードが確認された。これは特に遊びのルールが守れないことで生じ、喧嘩の解決に対して教師が重要な役割を担っていた。

【エピソード10：タイヤの上での押し合いからけんかへの移行】5歳児の子どもたちが、黙々とタイヤの上を歩いて遊んでいた。そこに私も入り遊んでいると、子どもたちが私をタイヤから突き落とそうと、押すようになった。そのうち子どもたち同士でも押し合いが始まっていく。

その後ある男の子が1人の女の子を強く押してしまい、その女の子は転んで泣いてしまう。驚いた男の子はあわてて、「大丈夫？」と声を掛け、起こそうとしたものの、女の子はしばらく泣き止まなかった。その場はそれで収まったが、その後別の女の子が倒された女の子の仕返しとばかりに男の子を強く押し倒してしまう。男の子は泣き、そこで保育士が仲裁に入る。保育士は、なぜこのようなことが起きたのかについてお互いに説明をさせ、タイヤの上で押して遊んではいけないこと、そしてお互いに謝ることを伝え、事態は解決した。また保育士は泣いていた男の子を撫で、男の子は落ち着くようになった。

#### 形態10：模倣遊びを通した自己抑制

ごっこ遊びを通して、自らを抑制するエピソードが確認された。

【エピソード11：お医者さんごっこを通して自らの衝動を抑える5歳児】5歳児がお医者さんごっこをしていた。男の子がけが人の役になり、机の上に乗せられていた。それを看病するのが2人の女の子である。女の子たちは、お医者さんと呼んでこようと言いだし、保育士に医者として男の子の診察をして欲しいと頼む。保育士は、男の子を覗き込み、どこが痛いのか聞く。男の子は、ぐ

ったりした様子で仰向けで寝て、覇気のない声で答える。そのうち女の子たちは、砂場の砂を塗り薬として見立て、男の子のひじ関節に砂を塗り込む。その箇所は病院で採血をする部分であり、それを真似ていることが考えられる。男の子は、静かに机の上に寝ていて、けが人の心境を想像し、演技しているようであった。

## 4. お わ り に

本研究では、幼児期の子どもの遊びの特徴及び遊びの中での態度や行動の発達の状況について参与観察を行い、その基礎的な資料を収集することを研究の目的とした。

その結果、遊びの特徴として、「空想の中での遊び」「適度な難易度」「ルールの存在」「学年に分かれた遊び」「活動量の偏り」「盛り上がりの難しさ」という6つの形態が確認された。これらの結果は、幼児期における遊びの様態の特徴やそれを作り出す上での困難性を表したものだと考えられる。また、子どもが遊びの中で態度や行動を発達させる実態では、「大人の存在」「ルールの存在」「遊びからけんかへ」「模倣遊びを通した自己抑制」の4つの形態が明らかとなった。これは遊びを通して態度や行動を発達させる条件やその際の遊びの状態の特徴であると考えられる。今後は今回明らかになった結果をもとに、遊びを通した態度や行動の発達のメカニズムについてより詳細に検討していく必要がある。

## 引用・参考文献

- 1) Ginsburg KR et al. (2007) The importance of play in promoting healthy child development and maintaining strong parent-child bonds. *pediatrics*, vol.119, pp.182-191.
- 2) 久保(2007) 身体教育のメディアとしての「あそび」再考. 体育哲学研究第37号.
- 3) 5歳児は年長児、4歳児は年中児、3歳児は年少児である。
- 4) B保育園では、自由遊びの時間が8:45~9:30及

び16：00～16：50の1日2回設定されている。  
5) 本稿で紹介するエピソードでは、参与観察を行っ  
ている著者も記録の中に含まれている。したがっ

て、エピソードの中で「私」と記されているもの  
は、全て研究者である著者のことを指す。